

[成果情報名]矮性ネピアグラス(晩生品種)の乾物収量、飼料品質および越冬性

[要約]矮性ネピアグラスは、葉身の比率、*in vitro* 乾物消化率および粗タンパク質含有率で示される飼料品質が高く、高い越冬性が期待できる有望な草種である。

[キーワード]越冬性、乾物収量、飼料品質、矮性ネピアグラス

[担当]畜産試験場 大家畜科

[連絡先]電話 0957-68-1135、電子メール s.fukagawa-123@pref.nagasaki.lg.jp

[区分]畜産

[分類]指導

[背景・ねらい]

ネピアグラスの矮性晩生品種(以下、矮性ネピアグラス)は、九州南部において越冬可能であり、放牧利用されている。一方、草高3m以上に達する長大型のネピアグラス普通品種については、長崎県の一部で多年生として青刈り利用されているものの、草高150cm程度の矮性ネピアグラスについては九州北部での収量性および越冬性に関する知見がみられない。

そこで、矮性ネピアグラスの収量性、飼料品質および越冬性を植え付け初年目および2年目における最終刈取り時期を変えて調査し、長崎県への導入の可能性について明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 年間合計の乾物収量は、植え付け初年目では2回刈りで1.2t/10a程度であるが、越冬後の植え付け2年目では3回刈りで約2.0t/10aと多収である(表1)。
2. いずれの番草とも茎に対する葉身の比率は1以上であり、葉身の比率が高い(表1)。
3. *In vitro* 乾物消化率および粗タンパク質含有率は、粗タンパク質含有率の3番草を除いて、暖地型イネ科牧草の平均(*in vitro* 乾物消化率54%、粗タンパク質含有率9.3%)より高い(図1、図2)。
4. 最終刈取りが10月および11月のいずれにおいても、翌春の越冬率に大差はなく、平均で約99%である(表2)。

[成果の活用面・留意点]

1. 草高150cmなので、青刈り利用に適する草種である。
2. 種子による草地造成ができないため、栄養茎で草地造成を行わなければならない。
3. サイレージおよび放牧などの利用性、現地での越冬性および持続性について、今後調査する必要がある。

[具体的データ]

表1. 刈取り日, 乾物収量および葉身/茎比.

試験年	刈取り日(月/日)			乾物収量(kg/a)				葉身/茎比 ¹⁾		
	1番草	2番草	3番草	1番草	2番草	3番草	合計	1番草	2番草	3番草
2004年 (造成年)	8/24	10/15	-	71.8	50.3	-	122.1	2.69	2.23	-
		11/16								
2005年 (造成2年目)	7/12	8/19	10/24	59.3	53.8	92.1	205.2	3.60	2.60	1.14
			11/18							

- 1) 茎部乾物重に対する葉身乾物重の比率.
- 2) 兩年とも最終刈取り番草は, 10月刈り区と11刈り区とを設けた.
- 3) 2004年の2番草および2005年の3番草における乾物収量および葉身/茎比は, 10月刈り区および11月刈り区の平均値.

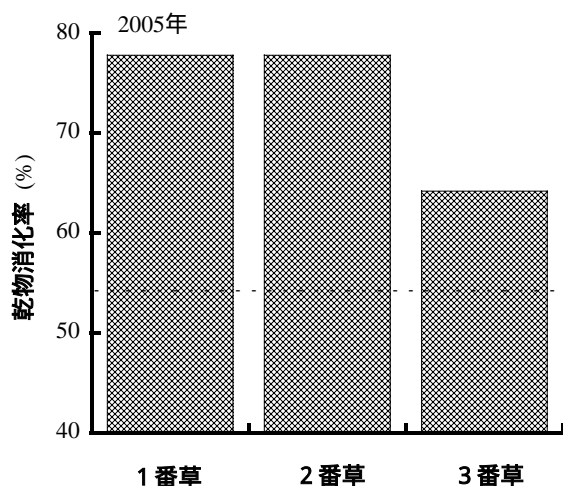


図1. *In vitro* 乾物消化率.
図中の点線は, 暖地型イネ科牧草の平均値(54%) .

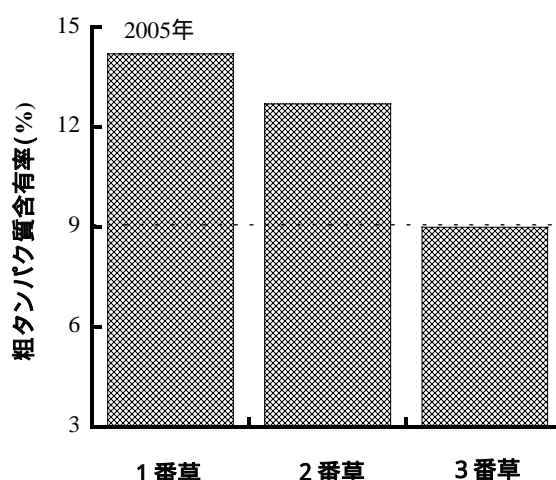


図2. 粗タンパク質含有率.
図中の点線は, 暖地型イネ科牧草の平均値(9.3%) .

表2. 2005年の春季における越冬率.

試験区 ¹⁾	越冬率 ²⁾ (%)
10月刈り区	99.1
11月刈り区	98.6
平均	98.9

- 1) 2004年の最終刈取りを10月および11月に行った.
- 2) 植え付けた株数に対する越冬した株数の比率.

[その他]

研究課題名: 優良草種および品種の選定

予算区分: 県単

研究期間: 2004~2005年度

研究担当者: 深川 聡、廣川順太、井上昭芳

既発表論文等: 深川ら(2006)日本草地学会第58回大会号